

文化装置としての家庭

—ソーシャルワークにおける「家族」再考—

The Cultural System as A Home Running Back Over “Family” in Social Work

渡 邊 慶 一

WATANABE, Keiichi

I. はじめに

今、家庭の中で何が起きているのだろうか。児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）が成立して依頼、地域のアンテナも敏感になり、子ども虐待に対して児童相談所が相談に応じたケースは急増した。それは同時に、地域が見過ごしてきた問題がようやく日の目を見たに過ぎないことを意味している。さらに最近の問題として、子どもが親を残忍な方法で手にかかる事件も頻発している。こうした一連の事件報道は私たちに何を伝えているのだろうか。家庭内で起きている出来事に目を向け、子どもにとって家庭の持つ意味を改めて問い直すことが求められている。

高橋（1987）によると、家庭は相互作用し合う親密な複数の個人が前提となっている。そして、①情緒に基づく相互作用を機能的要件とし、②成員の第一義的なウェルビーイングの追求、すなわち自己実現をめざす個人の基本的権利を最高度に保障するシステムであり、③個人の生き方を支援することをシステム目標とする、としている。

多くの場合、家庭の在り方が家族を構成するメンバーの生き方に影響している。このため家族は、家族メンバーへのサポータティブな機能を働かせることが求められる。子どもにとって、家庭は生活の根に相当するものである。しっかり張っている根であるかそうでないかによって、人間性という太い幹がどのように育まれるかが方向づけられる。また、さまざまな生活文化を背景に持つ子どもと遭遇する遊びや教育の場面で、その子らしさという枝葉がいかに覆い茂るかが決まっていくのである。

本稿では、家族の生活拠点である家庭を、家族が世代を超えて築き上げてきた歴史や家族が住まう地域の影響を受ける、文化が育つ場ととらえる。その文化の有り様は、家族によってさまざまである。支え合う文化的風土が育つ場合もあれば、傷つけ合う文化的風土が育つ場合もある。

ソーシャルワークは、個人に対する支援を行うときも、家族全体に目を向け、その相互作用性を継続的にアセスメントしていかなければならない。個人の抱える生活課題は、多くの場合家族が抱える生活課題でもある。たえず、家族が織りなす家庭の文化的背景を視野に入れて支援活動を行わなければ、方向性を見失う。

先行研究をもとに、家庭を文化の面によって考察し、ソーシャルワークが家族をどのようにとらえていけばよいのか改めて検討していきたい。

II. 文化の伝達機関としての家庭

1. 子どもの安全空間として家庭が持つ意味をとらえる

児童憲章は二項で、「すべての児童は、家庭で、正しい愛情と知識と技術をもって育てられ、家庭に恵まれない児童には、これにかわる環境が与えられる」としている。また、児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）はその前文で、「児童が、その人格の完全なかつ調和のとれた発達のため、家庭環境の下で幸福、愛情及び理解のある雰囲気の中で成長すべきであることを認め」としている。

家庭によって発達の可能性の基礎が形成されるということは、もはや共通理解といってよいだろう。社会的養護のうち、家庭的養護の形態が大切にされ、見直されてきた背景にはこのことがある。

家庭は本来、子どもにとって安全な空間であることが期待される。衣食住の適切な環境を保障することにより子どもの身体的な健康を保つ場が確保されることだけではなく、情緒豊かな人間性や感性を育てていくために情緒面の健康が保障されることが、安全な空間につながるだろう【図1】。子どもにとって、生活基盤を支える場は家庭にある。心身の成長・発達において、家庭から受ける影響がもっとも大きいのは、子ども期である。家庭という環境、その文化様式のあり方そのものが、子どもの人生や生活設計に正と負のさまざまな影響を及ぼす。

家庭は、子どもが成長していくなかで社会的な関係を作る磁場となる。このような安全な空間があるからこそ、子どもたちは地域で自由な関係性を築いていくことができるのである。

そうした家庭のあり方も変容してきたように思われる。「家族とは何か」と問いかけられた学生は、親しい友人も家族と感じる、と応えた。この応えからは、家族は血縁だけに縛られるものではないことがうかがえる。家族を、単なる血縁による結びつきとしてとらえていくことはもはやできないのではないだろうか。先述した問題の数々は、血縁や親族を前提にした家族が、必ずしも安全な生活環境ではなくなっていることを証明している。

家族社会学の立場から家族福祉について考察する野々山（1992）は、「家族とは、その構成員が自分たちは家族であると同一化できている範囲の人びとの集団」であるため、構成員に含めて考えるかどうかは「家族それ自体の主体的認識」によって決まる、としている。さらに、小林（2006）は家族看護学

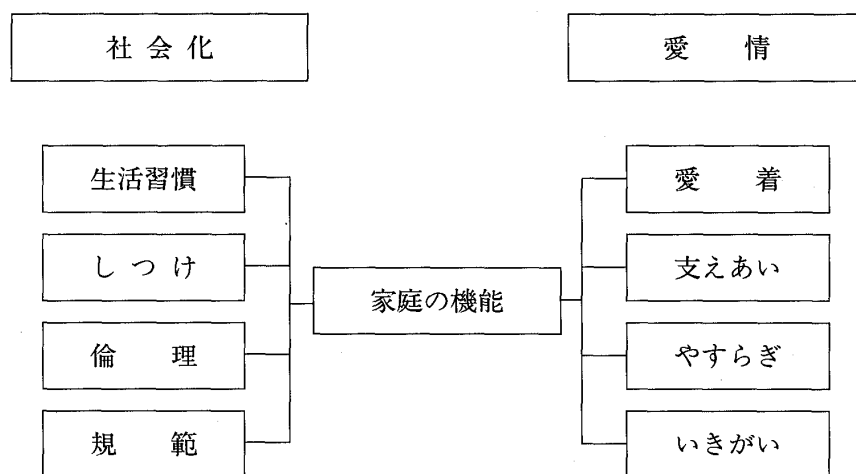


図1 家庭の機能

出所：北野幸子（2005）『家族の人間関係』福岡教育大学家政教育講座『家庭科授業支援ハンドブック 小学校編』福岡教育大学家政教育講座、6

の立場から、「家族だと、その人が信じるものが家族である」という。ここでは、血縁や親族としてのつながりだけを、家族の範疇としてとらえることはもはや意味をなさない。

家族は血縁だけによってはかられるものではないとする考えは、家族社会学において、家族看護学において、あるいはソーシャルワークにおいて共通する考え方となってきた。したがって、当事者自らが家族だと認識していることが鍵となる。

2. 家庭を文化を築く場とみる視点を形成する

広辞苑・第六版(2008)によると、「文化」(culture)とは、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」であり、「衣食住をはじめ、科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含」んだ、主に「人間の精神的な生活にかかわるもの」である。このような「物心両面」からみていくことは、家族生活の成立条件でもある(飯田 2003:37)

子どもにとって家庭は、特に精神的な生活が色濃く反映される文化を学ぶもっとも基本的なしくみを持っている。家庭のなかで共有されている文化が、子どもにとっては絶対的なものとなる。しかしながら、成長・発達するにつれ、外部との接触が多くなることによって、異なる文化と出会っていく。それが子どもたちの文化の摩擦から生まれる新たな刺激となる。そうした刺激との出会いによって、子どもの価値観は豊かな広がりをもつようになる。

家庭のなかで育まれた文化は、その世代だけで途切れるのではないことを、私たちは理解しておかなければならない¹⁾。家族の生活は、「生命の連鎖と文化の伝達の垣塙」(喜多 2005:4)であるという。生活文化や子育て文化を次の世代に引き継いでいかなければならないのである(喜多 2005:3)。

また家庭は、ある文化的価値のもとに育まれたコミュニティの影響を受けている。その意味で、家庭は文化伝達のためにコミュニティに巧みに仕掛けられた装置だといえる。広辞苑・第六版(2008)で「装置」は、「ある目的のために機械・道具などを取り付けること」または「そのしかけ」とであると記されている。ある一定の機能を持った、まとまったシステムなのである。

野々山(1992:5)は、「家族機能とは、家族がそれぞれ(1)人間形成の拠点、(2)人間性回復の拠点、(3)生活保持の拠点、(4)生活向上の拠点、(5)地域連帯の拠点であるということから派生し、かつ期待されるそれぞれの諸活動を意味している」と規定している。地域にそれぞれ独自の文化があるのと同じように、家族にもそれぞれの家族が築き上げてきた歴史がある。この歴史を理解する視点を欠くことは、日本型福祉社会構想の失敗を繰り返すことにつながる。家族機能は、家庭という生活文化の拠点によって左右されるといってよい。したがって、家庭について考えるとき、その文化が世代を超えて長年にわたって形成されてきた慣習であり、その慣習によって育まれた家族内や他者との関係を築き上げる文化的風土の存在に着目しなければならない。黒川(1986:14)がいうように、家族は何より民族的、文化的な特色を持った存在なのである。

3. 家庭における文化の固有性に目を向ける

家族全体のシステムは、夫婦や子どもというそれぞれのサブシステムから成立し、それらが有機的に関連することによって成立している。こうしたサブシステムが家族独特のルールを形成しており、それが各家庭の固有の文化的土壌となっている²⁾。

しかし、家庭内で形成されてきた文化的な価値観が子どもにとって通常であったとすると、新たな価値観を学ぶことによって、自らの価値観との間にズレが生じることになる。そのとき子どもはとまどい、その文化的価値が不信の温床となることさえある。

サティア (V. Satir) がいう、家族における相互的補充機能 (mutually reinforcing functions) によって結ばれた結果、家庭内における文化が方向づけられるのではないだろうか。その機能のうち、「親による教育を通して子どもたちに文化を伝える」という項目には、次のように記されている。

- 「役割」とか、異なる社会状況において他者といっしょに行動するところの社会的に承認された習慣とかを教える (この役割は、子どもの年齢とか性によっていろいろである)
- 無生物環境 (the inanimat environment) とのとり組み方を子どもに教える
- どのようにコミュニケーションするかを、すなわち、どのように言葉やジェスチャーを用いるかを、教える。かくして、子どもは他人によって広く受け入れられている意味を把握する。
- 情緒をどのように、いつ表現するか、ということを教え、広く、子どもの情緒的な反応能力を指導する (家族は、子どもの愛や恐怖に訴えたり、言語的に非言語的に伝えたり、あるいは、例を挙げたりして、子どもに教える)。

これらはいずれも、子どもの成長過程において社会的な行動を行う際、意味を持ったものである。社会的な習慣、家庭内や他者との関係の結び方や表現方法は家庭内で築かれた文化の影響を強く受ける。その影響力を、親や子どもがそれぞれどのように受けとめているかをアセスメントすることから支援活動ははじまる。家庭を全体としてみることにより、文化をつくってきた諸要素への接近をはからなければならない【図2】。

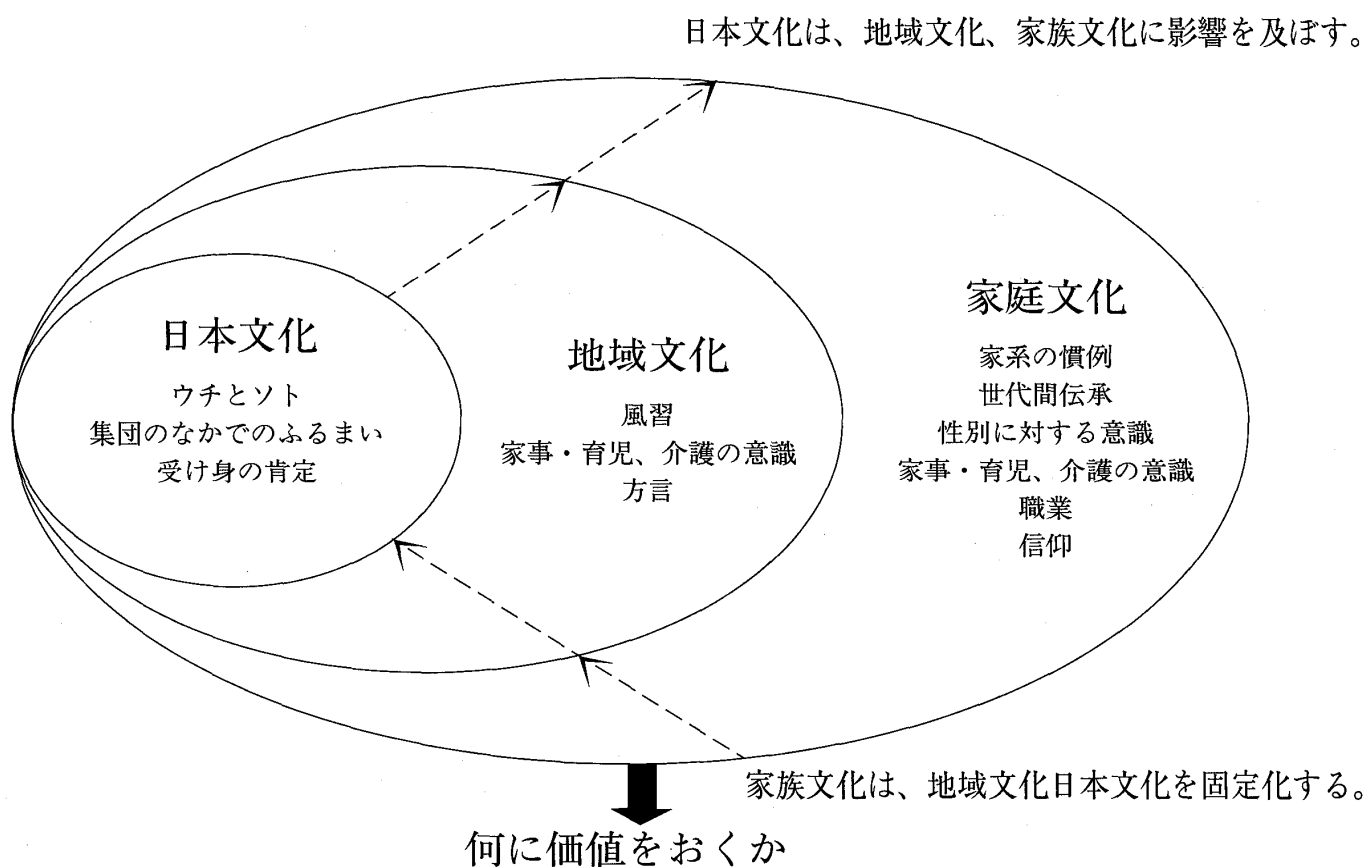


図2 家庭文化をつくる諸要素

III. ソーシャルワークが調整する家庭における文化

1. ソーシャルワークにおける家族支援の原点に立ち返る

家庭という場は、家族という構成メンバーにより成り立っている。福祉の視点から家族は、「集団としての家族」(family as the group) または「全体としての家族」(family as a whole) と考えられてきた。子どもはその全体を構成する一個の人格である。このとき、血縁や親族といった制度的関係のみを軸にして家族や家庭を考えるべきでないことは、先にも指摘したとおりである。家族の形態はさらに多様化の様相を呈し、里親や養子縁組、子どもを連れての再婚(ステップファミリー)により成立している家族も珍しくない。

ケースワークが体系化された頃、「ケースとは、すべて、家族のケースである」(Richmond 1917、参考にしたのは1965年刊のPaperback版)といわれた。リッチモンド(Richmond, M.)がその著書『社会診断』(Social Diagnosis)で著している。以来ケースワークをはじめとするソーシャルワーク実践領域において、個人をみるということは、個人を含めた家族全体をみつめるまなざしを持つことであることを伝統としてきた。どのような形態で成立した家族が家庭を築き上げたのかを、理解する視点を常に持ち続けなければならない。

リッチモンドがケースワークの母と呼ばれるのは、温情や同情、または宗教的な慈悲の精神によっておこなわれてきた実践をひとつの体系としてまとめ上げたことにある。しかし何よりも、個人の問題とされてきた要因を社会環境との関係でとらえようとしたことが、ソーシャルワークの伝統を作り上げたのである。その伝統は、ホリス(Hollis, F.)による次の記述をもってして明らかである。

ホリス(1966:125-126)はケースワークの中心となるのが、「“人と状況と、この両者の相互作用”の三重の相互関連性からなる“状況の中にある人間”の概念」であると述べている。家族に対するソーシャルワークにおいて、「状況」のひとつが家庭内に形成された文化的風土なのである。

ソーシャルワークから家族や家庭を考えると、情緒面・感情面の絆を基盤に考えていかねばならない。情緒的交流を通し、家族員がどのような結びつきのなかでどのように集団や全体として機能しているかがアセスメントを方向づける。絆を共有することができていなくても、家庭は成立する。しかしそのために、家族員がそれぞれの役割を果たすことができず、社会的支援の必要性が発生するのである。つまり、ソーシャルワークが機能回復のため家族間の調整ならび家庭における生活文化への介入を果たすのである。

2. 家庭の文化を事例によってみつめる

本例は実際のケースをもとにしている。そのため、本人より許可を得たが、人物が特定できないよう加工・修正を加え、倫理上の処理をしている。

父(47歳、不安定就労)、母(48歳、アルバイト)、A(20歳、長女、大学生)、妹(19歳、次女、大学生)、妹(16歳、三女、特別支援学校通学)の計5人からなる世帯である。

小学校の頃は非常に明るい活発なAであったが、中学校に上がりいじめを受けた頃から抑うつ傾向を示すようになった。

Aの話によると、父は職場での人間関係がうまくいかず、家庭で上司に対する愚痴をよくこぼす。酒が入ると感情的になる。マンションなので、感情的になると近所迷惑。人には迷惑をかけてはならないという。学校に行くのがしんどいからやめたいと言ったらダメだと言われる。もう死にたいと言ったら、それじゃあ死んだらいいと言われる。また、母や妹が病気になったら心配するのに、私はほったらかし。

表1 人間の多様性：多様性に由来するニーズや強さを特定する上で考慮すべき要素

- | |
|---|
| <p>A. 文化的要素</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 価値
物事、時間の使い方、支配的文化、権威、仕事、気分や感情表現などについての態度
過去、現在、未来志向
タブー 2. 関係－関わりのある方
他者との
物理的世界に対しての
精神世界に対しての 3. 家族構成
家族関係の性質
家族生活の内容
相違や変化の可能性
意志決定
世代的要素－年齢、性別
育児、家事 4. 歴史－移住
支配的文化との関係の歴史
集団の変化－歴史－意味の歴史 5. コミュニケーションのパターン－言語
用法、語彙、話し言葉、符号、方言、シンボル、文法、表現の幅
非言語的側面
パターン－短い会話の活用、時間など 6. コミュニティの構造
政治、経済、教育、宗教
相互扶助、社会化、社会的管理の手段
社会的、文化的、及び宗教的活動
保健・ケア
個人や家族にとっての資源 7. 対処のメカニズム
適応、補償、ストレスに対する反応、新しい状況や環境に対する適応 <p>B. 支配的な社会の態度や行動に関連する要素</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 偏見、差別、スティグマ、階層化、ステレオタイプ化の問題 2. 人種意識 3. 多数派文化に対する関係
距離、多数派の予想、搾取、マイノリティの過敏さ、苦痛や疑い、力関係 4. 生活水準の問題 5. 多数派集団との関係での集団のアイデンティティや集団の期待 6. 差異の評価の仕方 7. 機会またはその制限 <p>C. 個人差</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 志向性－文化に関して伝統的、同化的、適応的、混乱している 2. 自己、同じマイノリティ集団の他者、別のマイノリティ、支配的集団に対する態度 3. 自己認識、対処や適応のメカニズム、言語その他の意志疎通手段の使用 4. 家族や文化的集団との関係、その関係での責任または力量 5. その文化的集団のメンバーとしての顕著な生活経験 6. 多様性に基づく立場に影響された自己のダイナミクス、多様性が自己に与えている影響 |
|---|

出所：(Johnson 2001:176-177)

しかし、かつてまだ私が元気だった頃は、父とは一番仲が良かった。どうしてこのようになってしまったのか分からない。

母は、元中学の数学教諭。妹と比較する必要はないというが、Aの現在の様子について、否定的な考えもうかがえる。母によると、Aは父親より後に風呂に入りたくないとのこと。妹は遅くなったら先に入っていいというが、Aは絶対に嫌がる。食事もみんなは食べているのに、自分は食べずに待っている。親の言うことはあまり聞かないが、専門家は絶対だと思っている。クリニックのドクターには絶対的信頼感を持っている。自宅では感情的になってしまうので、話ができない。間に第三者が入ることで、ともに話しができる。母は、母子同席面接においてこのように語った。

次女は学力があり、口も立つ。Aの状態を理解することができず、「お姉ちゃんのくせに」という趣旨の発言が繰り返される。常に非難されている感じがし、次女に対して劣等感があるという。三女に対してはそれほど抵抗は感じない。

この事例では、家庭内に、しつけには厳しく、人様には迷惑をかけてはならないという精神的風土が築かれていた。その風土のなかで育ったAは、「こうであらねばならない」という自分自身の行動規範を身につける。そうしたスタイルに、いじめというアクシデントが加わる。クリニックに通うようになったのは、自分自身が培ってきた人格を否定されるような出来事に出会ってからである。投薬の副作用により、日中は常にボーとした感じになってしまう。それが家族には受け入れられない。かつて明かったAを知っているからである。家族から受け入れられていないと感じるAは、父や母の言葉がけにもどことなく疑念を拭うことができない。その状態が、Aにとってまた居心地の悪い雰囲気を作り出している。その状態で10年近くを過ごしているため、その雰囲気が家庭内の文化的風土として定着してしまっている。家庭内にどのような価値観が築かれているかによって、文化のしくみは下の世代に受け継がれていく。こうして家庭における文化が固定化されていくのである。

支援者は、家庭内に築かれた文化のしくみを理解し、関与していく。Aの側に立てば、父と母のあり方を否定することになる。父と母の側に立てば、Aを否定することになる。家族内におけるパワー（家族員の行動に変化を起こす影響力）の様態を把握することが家族全体のアセスメントにつながり、支援活動の手がかりとなる。その点で、文化が家族内のパワーの配分に重要な役割を果たしている（平山2000：112）。

この家族に対して、月1度、母子同席による面接を1年間行った。面接に際して、Aのかかりつけ医（精神科医）と連携をとるよう心がけた例であった。

3. 家庭において文化を形成してきた物語に寄り添う

たとえ支援活動のきっかけは個人であっても、ソーシャルワーカーは「いかなる特定のクライアントについても、文化の影響を理解するには、その人物が属する集団の文化全体を理解しなければならない」（Johnson 2001：174）のである。家族にとって家庭は文化的背景を持つものであることを自覚し、家族と家庭の関係に目を向けていかねばならない。

また同時に、コミュニティや日本文化の影響を多面的に理解することによって、今ある家庭の状況やその多様性に対する理解につながる【表1】。支援者は、文化を方向づける諸要素を分析し、各家庭のありのままを受けとめることによって、支援活動のプロセスを創造していく。

クライアントは、日本において、コミュニティにおいて、そして家庭において、どのような状況であろうと自分自身や家族をはじめとする共に住まう人々と作ってきた物語と共に生きてきた。その物語を肯定し、それに寄り添う姿勢が必要である³⁾。サレエベイ（Saleebey, D.）はストレングス視点により、

支援者が自らの価値観によって立ち、クライアントが生きてきた物語を書き換えるような権威性について警鐘を鳴らしている (Saleeby 1994)。家庭における文化と向き合う支援者としての態度は、家族のレジリエンス (自己回復力) への信頼である。

つまり、倉石 (2004: 21) が述べるようにソーシャルワークは、現象として表れる生活困難、個人病理また社会的逸脱行動などを否定的にとらえるのではなく、家族の歴史や文化そして関係性に理解を示しながら展開していかなければならない⁴⁾。支援者は、家族が築き上げてきた文化を共にふりかえりながら、文化を再構築するための支援を具体的活動によって展開していかなければならない。

IV. おわりに

本稿は、家族に対するソーシャルワークの方向性を探るうえで、家庭における文化を手がかりとして考察を進めた。その文化は家庭の固有性を発展させるものに寄与する一方で、時として家族全体を苦しめることにもつながる。

高橋 (1987: 2-11) は、家族は「福祉追求の集団」であるとともに「病源的機関」にもなることを指摘した。そのとき家庭は、高橋が指摘するように、“諸刃の刃”となる。つまり、人格成長や適切な発達を保障する場であると同時に病理現象を生み出す場にもなる。家庭内の文化のあり様が子どものウェルビーイングの保障にもつながっているのである。

子どもたちには多様な生き方や選択肢があるはずである。家庭内に築かれた文化に縛られることなく、子どもたちと対話していかねばならない。家庭のなかで、子どもたちがいきいきと育つ文化的風土が培われるよう具体的な行動として努力することが、支援者の使命である。子どもたちにとって、家族だと確信できる家庭が今後も築かれていくことを願うばかりである。

註

- 1) 黒川 (1986: 113) は、世代により伝達されていく親の子どもに対する関わりを、生物学上の遺伝にたとえ「文化的遺伝」として注目しなければならないという。
- 2) 黒川 (1986: 226) は、社会学者ポーラックによる家族障害汎化の原則 (principle of pervasiveness of family disturbance) を紹介している。これは、家族や家族員の関係から生じた障害は、家族内のサブシステムから、他のサブシステムに波及し、やがて家族内の全体系へと汎化していく現象である。
- 3) 得津 (2001) は、「それぞれの家族における家族各員のコンセンサスを共有し、そのコンセンサスに基づいて家族関係の調整、あるいは、他の専門職や社会資源と家族との関係を調整し、個人・家族がもっともありたいような姿でいられるための援助を目的として家族面接はなされ、そのとき最大限に家族面接は機能しうる」と述べている。
- 4) ソーシャルワークの価値観にもとづき家族をとらえるならば、家族の歴史や生活の歩みを理解しようとする姿勢を保持しなければならない (倉石 2004: 18)

文 献

- 藤崎宏子 (2000) 「現代家族と『家族支援』の論理」『ソーシャルワーク研究』26 (3)、4-10
- 平山尚 (2000) 『MINERVA 福祉専門職セミナー⑥ 人間行動と社会環境—社会福祉実践の基礎科学—』ミネルヴァ書房、90-117
- Hollis, F (1972) Casework: A Psychosocial Therapy (=1966 黒川昭登・本出祐之・森野郁子訳『ケースワーク—心理社会療法—』岩崎学術出版社)
- 飯田哲也 (2003) 『家族と家庭—望ましい家庭を求めて—第三版』学文社

- Johnson Louise C. & Yanca Stephen J. (2001) *Social Work Practice: A Generalist Approach*, 7th ed. (= 2004 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房)
- 喜多祐莊・小林理 (2005)『やわらかアカデミズム・くわかる』シリーズ よくわかるファミリーソーシャルワーク』ミネルヴァ書房
- 北野幸子 (2005)「家族の人間関係」福岡教育大学家政教育講座『家庭科授業支援ハンドブック 小学校編』福岡教育大学家政教育講座、6
- 倉石哲也 (2004)『ワークブック社会福祉援助技術演習③ 家族ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房
- 黒川昭登 (1986)『家族福祉の理論と方法』誠信書房
- 野々山久也 (1992)「家族福祉を考える」野々山久也編著『家族福祉の視点―多様化するライフスタイルを生きる―』ミネルヴァ書房
- Richmond, Mary E. (1965) *Social Diagnosis* Paperback ed., The Free Press, pp. 137-142
- Saleebey, D. (1994) *Culture, Theory, and Narrative: The Intersection of Meanings in Practice*, *Social Work*, 39(4), 351-359
- 澁谷昌史 (2002)「ソーシャルワーク実践基礎理論」北島英治・副田あけみ・高橋重宏・渡部律子『く社会福祉基礎シリーズ②> ソーシャルワーク実践の基礎理論』有斐閣、282-303
- 杉山佳子 (2007)「変容する家族とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』32 (4)、4-13
- 高橋重宏 (1987)「家族と福祉」山根常男監修、本村汎・高橋重宏編『家族と福祉の未来―現代家族と社会福祉への提言―』全国社会福祉協議会、2-11
- 得津慎子 (2001)「家族面接―ソーシャルワークの立場から―」『精神療法』27 (4)、31-39